

縄文土器研究における「様式」についての覚書：小林達雄氏の様式概念をめぐって

松永，幸男
北九州市立考古博物館

<https://doi.org/10.15017/1560318>

出版情報：九州文化史研究所紀要．38，pp.1-20，1993-03-30．九州大学文学部九州文化史研究施設
バージョン：
権利関係：



縄文土器研究における「様式」についての覚書

—— 小林達雄氏の様式概念をめぐって ——

松 永 幸 男

1. はじめに
2. 小林達雄氏の「様式」について
概念の内容 他の概念との比較 様式の背景
3. 小林達雄氏の様式論に対する検討
山内清男「型式」・小林行雄「様式」との対比 「縄文土器様式編年表」の検討
4. おわりに

1. はじめに

考古資料が示す地域性・地域差には、全く異質なものから同質の中での程度の差まで、様々な質の違いが認められる。そして、これらの地域差を生ぜしめた背景について、個々の事例に即していくつかの解釈が示されている。しかし、一口に「地域差」といっても質的に異なる差異の存在が容易に推測されるため、これらの検討結果を相互に比較

検討し、より普遍的な結論を求めることは容易ではない。筆者らが以前に縄文時代後期の「縁帯文土器」群の空間的様相について検討した際の立場もこのような前提に立つものであった。⁽¹⁾

縄文土器研究において用いられている概念についても、こういった質的な差異を反映できるほど充分に概念が用意されているわけではない。このようなことを考えるとき、縄文土器研究において、小林達雄氏によって提唱されている「様式」概念は山内清男氏の「型式」とは異なるレベルでの土器群のまとまりを示す概念として有効なものであると考えられるのである。

小林達雄氏の「様式」論については命名法を始めとして、いくつかの批判が有るものの、その内容については評価する意見も少なくない。しかしながら、その概念規定において、「気風」・「雰囲気」といった指標が用いられるため、第三者が小林達雄氏の目指す「様式」を設定することがきわめて困難であることもまた事実であろうと思われる。小稿においては、小林達雄氏の様式論を検討することを通して、縄文土器を一まとめにくくる際のレベル差の違いについて若干考えてみたい。

2. 小林達雄氏の「様式」について

概念の内容

小林達雄氏は縄文土器が山内清男氏の「型式」という一つ概念で説明するにはあまりに複雑であることを指摘し、少なくとも型式 (type)、様式 (style)、形式 (form) という三つの概念の導入が不可欠であるとする。⁽²⁾ このうち「型式」はいくつかの個体間に共通する属性によって分類された一群の土器であり、また「形式」は共通の機能を満たすものとして生み出された「かたち」である。また、形式が一形式上のヴァリエティーとしての位置を占めることもあ

わけて指摘している。

型式の認定は土器の形態を決定するときさまざまな属性によって行なわれるが、「それらの形質的な属性のうち、とくにその型式に独特な雰囲気や効果を醸しだしている気風がある」ことを指摘する。そして、小林達雄氏のいう「様式」は「共通の気風をもつ型式の組み合わせ」として説明され、「地域的にひろがり、時間的に存続する」ものとされる。さらに、「様式は空間的変化をとるものであり」、「さらに時間的に変化するものである。」「かくして縄文土器の全体は特定の効果および雰囲気有する様式⁽³⁾とに分解される」のであると、述べる。

小林達雄氏のいう縄文土器の各様式は、このように一定期間存続してやがて次の様式と交替してゆくが、その存続期間は様式を構成する型式の編年にもとづいて数段階に区別される場合がある。これらの型式はもちろん氏の定義からして同一の気風をもつものとみなせるものである。また、「各段階は型式学的に共通する要素や効果その他によって一括される土器の型式の集合体であり、あるいはおよび層位的な共伴関係によって判断される土器型式の組み合わせである。」⁽⁴⁾したがって、小林達雄氏の様式は「複数の型式の組み合わせとしての空間的な広がり、それら型式の時間的組列を含むもの」ということになる。⁽⁵⁾そして、氏は一様式内での時間差を示す変遷段階を「○○式土器第○様式」(例えば、「勝坂式土器第一様式」等)といった表現で呼ぶ。⁽⁶⁾

他の概念との比較

それでは、この小林達雄氏によって新たに提出された「様式」概念は、既存の諸概念といかなる関係にあるのだろうか。ここでは、小林達雄氏自身による対比結果についてみてみたい。

小林達雄氏はまず「厚手式、薄手式土器、あるいは岡本勇氏の撚糸文系土器群、条痕文土器群など便宜的に総称された型式群が様式である」ことを述べるが、⁽⁷⁾さらに氏の提示した諸概念と山内氏の「型式」概念、及び小林行雄氏の

「型式」・「形式」・「様式」概念との比較を行なっている。これは小林達雄氏が新たに提示した「様式論」の存在意義をアピールするためにも、またその内容を明確にするためにも不可欠な作業である。

小林達雄氏による山内清男・小林行雄両氏の諸概念との対比結果をまとめれば、おおよそ以下のようになる。まず、山内氏が地方差、年代差を示す年代学上の単位として制定した型式を、小林達雄氏の概念体系における一樣様式内の細分された変遷段階に相当させている。⁽⁸⁾これは一地方の一時期に製作使用された土器は複数の型式を含むものであり、年代学上の単位の実際はそうした型式の集合体あるいは組み合わせとして認められることによる。他方、この山内氏の「型式」については、小林行雄氏の「様式」概念にも相当すると述べており、⁽⁹⁾ごく大まかには、小林達雄氏の「一樣式内の細分された変遷段階」＝山内氏の「型式」＝小林行雄氏の「様式」という対応関係を考えていることが想定できよう。

また、山内氏の「型式」については、先述の岡本勇氏の「撚糸文系土器群」等のように、小林達雄氏の「様式」概念にはば一致する内容をもつ土器群に対して用いられた場合があったことも指摘する。例えば、大洞B・BC・C 1・C 2・A・A'といった各式を複数含む「亀ヶ岡式土器」、あるいは安行1・2・3 a・3 b・3 c 式についての「安行式」といったように、年代学上の単位としての型式を通時的に一つのまとまりを示す特色を有することからいくくりにし、これに総称名として与えられたと思われる型式名が存在することを指摘している。⁽¹⁰⁾

一方、小林行雄氏の三概念との関係については、「型式および形式は寸分違わない」が、「様式の意味するところに違いがある」と述べる。⁽¹¹⁾確かに、小林行雄氏の「様式」は一般に「同地域・同時代に行われた一群の型式」⁽¹²⁾をさす概念として用いられており、「地域的にひろがり、時間的に存続する」⁽¹³⁾小林達雄氏の様式が示すものとは、具体的に研究例をみた場合、用いられ方が異なるようである。

様式の背景

現在、縄文時代全般を通じて七十余の小林達雄氏の「様式」が設定されているようである。⁽¹⁴⁾これらの様式は「確たる縄文土器編年に基づく」いて位置づけられ、「土器様式の出現・展開・消滅あるいは他様式との共存関係と相互の影響、そして様式の交替劇等々についてきわめ」られる。⁽¹⁵⁾そして、この土器様式の動静は、土器上の現象にとどまらず、縄文時代の歴史上の事件が背景となり、多かれ少なかれその一端が土器に反映されているものと考えている。⁽¹⁶⁾

また、一方土器様式圏の広がりについては、それをささえた集団の地域的なまとまりがあったことを想定する。つまり、「様式の地域的なまとまりが、特定の一つの雰囲気とそれをつくり出す土器づくりの流儀に合意する集団の存在を表わすものと理解」している。そして、その様式圏の性格についてさらに具体的に言及し、「・・・日常的な生活領域による集団は、他の集団との交易や通婚などによって連合体を組み、世界観を共有し、土器様式を共有していたものと推定される。かくて、固定的な生活領域とその連合体は、いわば方言圏を形成したとみることができる。」⁽¹⁷⁾方言は失われたが、土器様式圏にその広がりや範囲の一端が反映しているのである。」と、述べている。

3. 小林達雄氏の様式論に対する検討

小林達雄氏の様式論に対しては、これが既に弥生土器研究を中心として広く用いられている小林行雄氏の様式と同じ用語を用いていることや、様式設定にあたって「気風」というきわめて表現しにくく、ときとして客観性をもたせにくい場合もある基準を採用していることなどもあって、その意図は評価しつつも全面的な賛意を表する意見ばかりでない。たとえば、横山浩一氏は小林達雄氏の様式論について触れる中で、「型式細分化の傾向のなかで大局を把握しようとする意図は評価できるが、小林行雄の『様式』と同じ文字に違った意味を持たせているので混乱をまねきや

すい。混同をさける何らかの配慮が望まれる。」と述べるが、これは小林達雄氏の様式論に対する評価を代表する意見の一つといえよう。⁽¹⁸⁾

ここでは、他の研究者が提示している諸概念のうち、小林達雄氏によってしばしば比較検討の対象とされてきた、山内氏の「型式」、及び小林行雄氏の「様式」との比較において、小林達雄氏の「様式」概念について再検討したい。さらに、小林達雄氏による様式概念適用の一つの帰結である「縄文土器様式編年表」を検討することによって、設定された様式の内容について検討したい。

山内「型式」・小林行雄「様式」との対比

ここでは特に小林達雄氏による「一様式内での時間差を示す変遷段階」と、これにほぼ相当するとされた他の概念との対比について検討したい。先の記述においては、これが山内氏の「型式」に相当させられていること、及び山内氏の「型式」が小林行雄氏の「様式」にほぼ相当すると述べられていることから、三者がほぼ同様な内容を持つものと考えられているものと理解した。しかし、これら三者の内容については、小林達雄氏によってこの理解とは若干異なる説明もまたなされているのである。

小林達雄氏は、山内氏の「型式」と小林行雄氏の「様式」とがともにその単位の中に小林達雄氏という様式を複数含む場合にあって、それらを区別せずに包括してしまう点に注意する。そして、「一方、筆者は同時に併存した勝坂式土器様式と加曽利E式土器様式を区別しながらも、その併存している様相をうまく表現する用語を決定するにいたっていない」と述べ、氏の「一様式内の変遷段階」は当然のことながら異なる気風を示す他の様式に含まれる土器を含んでおらず、これを含む場合もみられる山内氏の「型式」や小林行雄氏の「様式」とまったく同一というわけではないことを示唆する。⁽¹⁹⁾

しかし、小林達雄氏はさらに別稿で「各段階は型式学的に共通する要素や効果その他によって一括される土器の型式の集合体であり、あるいは及び層位的な共伴関係によって判断される土器型式の組み合わせである」とも述べているのである。⁽²⁰⁾この後者の考えに立つ場合、本来「共通の気風をもつ型式の組み合わせ」として設定されるべきはずの様に、「あるいは及び層位的な共伴関係によって判断される」部分が含まれる場合もあることになるが、そうすると本来は異なる気風をもつものが結果的に同一の様式内に含まれることになる可能性を排除できなくなるのである。以上の理解が妥当なものであるならば、一様式内の変遷段階についての説明は、小林達雄氏による「様式」の定義にそぐわないように思われるし、このような内容を示すのであれば、一様式の変遷段階は、やはり山内氏の「型式」や小林行雄氏の「様式」とほぼ同じ内容を示すものと改めていうことができよう。⁽²¹⁾

小林行雄氏の様式概念との関係についてさらに述べるならば、小林達雄氏は、日本考古学における様式・型式・形式という三概念のうち、氏の型式・形式は中谷治宇二郎・小林行雄両氏のそれと寸分違わず、様式の意味するところに違いがあることを述べつつ、また、三者の考えは大筋においては共通するとも述べている。小林行雄氏の「先史考古學に於ける様式問題」⁽²²⁾中の次のような記述をみると、小林達雄氏の様式と小林行雄氏の様式とが、運用上の相違は別として、本来的には全く異なる概念というわけではないようである。例えば、この論文文中において、小林行雄氏は「様式概念の歴史化は、個性を時空論に固定し、様式を様式保持者によって基礎づけようとする所に始まる。かうして時代様式が、地域様式が、又、民族様式、階級様式が、個人様式の他に區別せられよう。文化現象が力強く傳播のうちに彫り出されてゐる時、或は時代様式は地域様式と相重なるであらう。例へそれが如何にあらうとも、一の対象は芽生した土地をもつ限り、ある時の日の光に生い立つ限り、常に地域と時代との二つの様式をもつ。」と述べている。また、「様式現象は大きくも、又小さくも現はれる。一の様式は更に幾つかの様式に分れ、或は他の様式と共に新らしい様式を組み立てる。」とも述べていることは、一つの様式によってくくられる範囲が研究の目的に応じて時

空間的に伸縮自在であることをいうものであろうか。既に、都出比呂志氏が指摘しているように、「小林行雄の弥生土器様式論において当初は時間的・地域的の二重の意味をもったが、やがて畿内第三様式などという、年代の基準としての様式の側面が強調されるようになった」⁽²³⁾のであり、小林行雄氏の様式をこの年代の基準としての側面が強調された小林行雄氏の様式と対比するため、両者の違いのみが注意を引き、小林達雄氏の命名法への批判へとつながっていったものと考えられる。⁽²⁴⁾

「縄文土器様式編年表」の検討

先述のように、小林達雄氏によると「縄文土器約1万年の歴史を通じて、草創期から晩期までに各地で継起した様式は約70を数える」という。⁽²⁵⁾氏によって数次にわたって提示されてきたこの様式の設定はおそらくそのほとんどが小林達雄氏自身による設定と受けとめて良いと思われるが、まず、その設定のあり方についてみてみよう。⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾

「様式」は各型式間に共通する気風に基づいて設定されているが、この気風は土器製作における流儀にかかわるものであるという。そして、その流儀の例としては「素地づくり」・「成形」・「施文」・「焼成」等があげられている。いずれの属性もきわめて漸移的な変異を示す性質のものと考えられるが、小林氏はきわめて具体的かつ明確に認識できる例をあげて説明している。ただ、各様式の具体的な説明は、小林氏の表現によればさまざまな人の顔を不特定多数の中から一瞬のうちに識別することができながらもそれぞれの識別の根拠を言葉で答えることが難しいと同様に容易なことではなく、このため気風や雰囲気という言葉を用いて説明が行われていることが氏によって述べられており、この個々の基準について細かく検討を加えてもあまり生産的な議論とはならないであろう。また、個々の様式が有する諸属性を一つ一つ個別に検討しても、これらがある関係のもとに結合した結果、それらが総体として生み出す「 α 」的な効果があることもしばしば経験することであろう。

したがって、ここでは小林達雄氏が提示している縄文土器様式編年表に示された各様式相互の関係を具体的に則して検討することによって、氏の様式論の有効性について考えてみたい。なお、筆者には日本列島全体にわたって小林氏設定の縄文土器様式を検討する能力はないので、九州地方について設定された様式についての検討でこれに代えたい。これは筆者の能力による選択ではあるものの、九州地方に展開した縄文土器群には系統の違いを明確に弁別できる土器群や、ある時点で系統が途絶える土器群がみられるなど、「気風」の共通性によって土器を一まとめにくく小林達雄氏の様式を検討するにはきわめて良好な対象であることも事実である。

小林達雄氏の「様式」には、時間的な深さとともに、空間的な広がりが含まれるが、様式の時間的な広がりについては他様式との区別の問題とともに後述することとし、ここではまず同時期に隣接して存在する他の様式との関係について検討したい。

草創期以降、九州地方に関連する様式として設定されているものを順にあげるならば、「隆線文系」・「早期九州貝殻文系」・「押型文系」・「塞ノ神・平栴」・「轟」・「曾畑」・「阿高」・「市来・一湊」・「九州磨消縄文系」・「黒色磨研」・「凸帯文系」等がみられる。草創期については、まだ資料数の不足もあつてか、明確な様式編年案が出されていないようであるが、これ以外の時期については黒色磨研土器様式と凸帯文系土器様式の時期を除いて、ほぼ隣接する中国・四国地方との間に実線で境界線が引かれている。これは縄文時代早期以来、分布範囲に広狭の差はあるものの、他の地方とは異なる系統の土器群が展開してきた九州地方の様相をよく表現しているといえよう。

小林達雄氏の様式編年表はこのような隣接する土器分布圏同士がその境界線を若干移動させつつも基本的に他の地域の土器にとって代わられることなく推移していった状況を表現するのには適しているといえよう。しかし、九州在来の土器系統が、段階的に汎西日本的な土器分布圏に包括されていた縄文時代後期前葉から中葉にかけての状況についてはどうか。小林達雄氏の縄文土器様式編年表中の九州磨消縄文系土器様式を例としてとり上げ検討し

部	関	東	東	北	北 海 道
文 系					〈無 土 器 文 化〉
／ 円 孔 文 系					
文 系					
(+)					
		撚 系 文 系		押 型 文 系	
貝 殻 沈 線 文 系					
文 系					早期北海道平底
東海条痕文系					縄文 尖底系
薄手無文					
羽 状 縄 文 系					前期 北海道 押型文系
諸 磯		浮島・興津			
善 提					前期 大木
五 領 ケ 台					
猪 沢					中期 大木
勝 坂		阿 玉 台			
炎	唐草文系	曾 利	加曾利E	北関東加曾利E	北 筒
称 名 寺					
堀 之 内					入 江・十腰内
加 曾 利 B					
(+)		安 行		瘤 付	御 殿 山
清水天王山		晚 期 安 行		(上ノ国)	
(+)		前 浦		亀 ケ 岡	
浮 線 網 状 文 系					幣 舞
					統 縄 文

縄文土器様式編年表

	沖 縄	九 州	中国・四国	近 畿	東 海	北 陸	中
草 創 期	10000 B.C.	無 土 器 文 化 ？ ↓	隆 線				
	9000		爪 形 文 系				
	8000		多 縄				
早 期	7000	無 土 器 文 化 ？ ↓	(+)				
	6000		早期九州 貝殻文系	押 型 文 系			
	5000		塞ノ神・平楯	条 痕			
前 期	4000	南 島 沈 線 文 系	(爪形文) (+)	森	東海条痕文系	薄手無文	
	3000		(+)	曾 畑	北 白 川 下 層		
	2000		阿 高	五領ヶ台	十 三 新 保・新 崎		
中 期	1000	南 島 沈 線 文 系	市来・一湊	九州 磨消 縄文系	緑 帶 文	上山田・天神山 火 串田新・大杉谷 (+) 氣 屋 三十 稲場	
	0		黑色磨研	凹 線 文 系			北 陸 晚 期
	0		凸 帶 文 系				

小林達雄氏の

たい。

小林達雄氏によって九州磨消縄文系土器様式として取り上げられた土器には鐘崎式から西平式までの土器群が含まれるようであるが、⁽²⁸⁾これらの土器群は九州地方において全く自立的に型式変化を遂げたのではなく、東からの波状的な土器情報の伝播を受けて型式変化を遂げていったものである。⁽²⁹⁾小林達雄氏が本様式について「四国・中国の磨消縄文系土器様式と兄弟分の関係にあり、さらに東日本における磨消縄文発達の動静とも連絡するものである。」と述べているのは、まさしくこのような様相を指摘したものであろう。したがって、まずこの小林氏の様式編年表については、その表現法において「九州磨消縄文系」と「縁帯文土器」との間に、例えば「阿高」と「船元」のような全く系統的に異なる様式間に引かれたのと同じ実線を引くべきではなからう。しかし、一方では、九州地方の磨消縄文土器がかなりの地域色を示しているのも事実であり、⁽³⁰⁾これらを通時的にまとめ得るか否かは別として、これより東の地域に対してあるレベルにおいて一まとめにくくすることは必要であろう。やや個別具体的な内容となったが、要するに、小林達雄氏の様式編年表にはまとめ方におけるレベルの違うものが並列して配置されている例があり、このことに示されているように、小林達雄氏の様式概念自体に小論の冒頭に述べたようなこのようなレベル差に対する配慮が欠落しているのである。⁽³¹⁾

これに関連して、小林達雄氏の様式の空間的広がりについて若干ふれてみたい。⁽³²⁾小林達雄氏の様式は、その様式内における時間的変遷は先述のように「○○式土器様式第○様式」といった呼称の変遷段階を用いて概観することができる。これは別の見方をすれば、様式の空間的な広がり、このような変遷段階を一律に適用できる範囲に収まることを示すことになる。⁽³³⁾ところが、例えば阿高式土器様式の分布圏は、中期の後葉から末にいたって、「岩崎下層式」、「阿高Ⅲ式」・「坂の下Ⅰ式」という地域差を示す三型式の分布圏に分解し、以後それぞれ型式変化の方向を異にする。⁽³⁴⁾しかし、依然として東に隣接する土器分布圏に対しては同一の範疇でくくるべきまとまりを示しているもので、

小林達雄氏のいう同一様式をなすものでもある。このような同一様式内に於いて空間的に並存する、様式よりも下位のレベルでのまとまりを包括できるような概念の整備が必要であると考ええる。「阿高式土器様式」の場合についてつけ加えるならば、このような場合について分布圏が分解した段階をもって、それぞれを改めて一つの様式とした場合、これら三様式は明らかに阿高式土器様式というレベルでの「様式」よりは下位のレベルに位置づけられる。このことは三者間の関係とこれら三者と東に隣接する土器様式との関係とが質的に同一のものとしては扱えないことから明白であろう。

次に様式の交替に関連して若干述べてみたい。小林氏の様式論は氏が述べるように、「土器様式の出現・展開・消滅あるいは他様式との共存関係と相互の影響、そして様式の交替劇等々についてきわめ」る際の、土器群のとりえかたとして有効な面をもつものであろう。しかし、これは例えばかなりの規模の人の移動に伴う土器様式の伝播のように、様式が劇的に交替する場合にはきわめて鮮明にその様相を表現できるものの、そうではなくこのような大規模な人の移動に伴うものではなく、文化的優劣関係等を背景として漸移的・段階的に土器様式の交代が進行した場合についてはきわめて表現しにくい。この問題については、少なくとも同時期の土器組成を把握する概念装置を準備することが必要であろう。この点については小林達雄氏自身も「筆者は同時に併存した勝坂式土器様式と加曾利E式土器様式を区別しながらも、その併存している様相をうまく表現する用語を決定するにいたっていない」と述べ、八幡一郎氏の提唱する「相₃₆Phase」概念の借用も検討しているようである。他方、土器様式の交替の様相については、田中良之・岩永省三両氏が、同時期の土器組成をなす土器群を精製・半精製・粗製といった精粗の次元と系統差とを用いて構造的に把握することによって、土器様式の交替の様相を動的に描くことに成功している。₃₇小林達雄氏が氏の様式概念導入の目的の一つとして掲げる他様式との共存関係と相互の影響、及び様式の交替について検討するためには、これらの諸概念を用いた研究との有機的な連係を求めることが必要であろうと考える。

おわりに

小林達雄氏の「様式」は、山内清男氏によって大綱が整えられ、その後も精緻化が進む縄文土器編年を基礎としており、これによって確固たる時間的な位置づけが与えられている。この点において縄文土器の歴史的展開をきわめたるための有効な手がかりとなろう。氏は「様式の設定は、研究者の分析とともに着眼点に基づいてなされる」と述べ、また、型式分類についても、「型式の許容範囲の設定は分類する研究者の視点に左右される」とも述べており、氏の提示した「縄文土器様式編年表」に掲載された諸様式をはじめとして、決して唯一無二の絶対的な分類案など存在しないという、考え方として許容量の大きいきわめて柔軟な姿勢を示しているものといえよう。

上記のような氏の考え方に則り、誤解を恐れず、あえて極論を述べるならば、「時間的かつ空間的かつ系統的に連続して存在し、ある共通性をもつてまとめ得るまとまり」を小林行雄氏の様式も、小林達雄氏の様式もともに包括できるような概念として、とりあえず設定することができのではなからうか。このような考え方に立てば、小林達雄氏の土器様式編年表に具体的に示された氏の「様式」は小林達雄氏の研究目的に沿って設定されたいわば特殊化した様式群を提示したものと改めて理解できるのであり、この意味において小林達雄氏設定の様式を氏の名前を冠して便宜的に「小林達雄様式」であると言うこともできよう。

土器型式の細分に伴い精緻化が進む縄文土器編年を背景として、これを大局的に把握し直そうとする小林達雄氏の「様式」による土器群の抽出は、縄文土器群の動態を捉える上で新しい見方を与えるばかりでなく、日本列島に分布する縄文土器全体を日本列島外の他地域の土器群と比較する際にも有効な土器群の捉え方を提供するものと考ええる。しかし、その一方で、小林達雄氏による具体的な様式設定を検討するとき、質的に異なる土器群のまとまりを同列に配置している場合も認められるのである。小稿において若干触れたように、九州地方の土器群のまとめ方においても

明らかに再整理の必要があろう。小林達雄氏の「様式」概念はその範疇の階層的な体系を整えてこそ、真にその効力を發揮するものと考ええる。

日本の考古学界に常に新しい考え方を積極的に紹介・導入してきた小林達雄氏に対し、自らの浅学非才を省みず多々失礼な言のあつたことを深くお詫び申し上げます。

本誌に拙文を掲載いただくにあたっては、当初、縄文後期土器をとり上げ論ずることで田中良之氏には御了承いただいた。当初の予定とは全く異なる原稿をお送りし、田中氏には多大な御迷惑をおかけした。深くお詫び申し上げます。

註

- (1) 田中良之・松永「土器文様の伝播と位相差」『Museum Kyusyu』三九 一九九一年
- (2) 小林達雄「型式、様式、形式」『日本原始美術体系Ⅱ縄文土器』一九七七年
- (3) 以上の「」内の引用部分はすべて註(2)文献による。
- (4) 小林達雄「縄文土器の編年」『縄文土器大観』一 一九八九年
- (5) 小林達雄「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観』四 一九八九年
- (6) 註(5)に同じ。
- (7) 註(2)に同じ。
- (8) 註(4)に同じ。
- (9) 註(5)に同じ。
- (10) 註(5)に同じ。

(11) 註(5)に同じ。

(12) 横山浩一「型式論」『岩波講座日本考古学』一 一九八五年

(13) 註(2)に同じ。

(14) 註(5)に同じ。

(15) 註(4)に同じ。

(16) 註(4)に同じ。

(17) 註(5)に同じ。また、この点については、下記の文献において詳細に論が展開されている。

(18) 小林達雄「縄文時代領域論」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集 上巻』一九八三年

(19) 註(12)に同じ。

(20) 註(5)に同じ。

(21) 註(4)に同じ。

(21) ただし、実際の資料操作上、いわゆる精製土器は別として、粗製土器などについてはどの「様式」と気風を同じくするかということ判断するのがきわめて困難な資料も多数存在すると思われる。したがって「様式」の本来の概念を念頭におきつつ、土器の伴出状況なども参考にしながら「様式」を設定していく作業は様式概念適用上のいわば便宜的なものかもしれないが、実際的な方法であることも確かであろう。

このような状況は、小林行雄氏の「様式」の運用にあたっても認められるようである。例えば、氏は『彌生式土器聚成圖録』中の「様式」の項において、「器形の特徴、装飾の技工、文様の構想、素材の組成、その様な個々の土器にあらはれる可視的なメルクマールは、それ／＼様式の構成に缺くべからざるものであるが、それと共にかゝる齊一性をもった土器と土器とが相合して、各々にその用を分擔し、要を満たし、生活形態の一部を構成する土器複合體としての齊一性も亦忘るべからざるものである。」と述べ、さらに土器様式の検出は「様式を同じうする土器資料を集合し、様式を異にする土器資料を

分別する方法によるほかはない」とし、「遺蹟單位型式群の引算によつて算出せられる」ことを述べる。つまり、土器様式の検出にあつては、個々の土器の特徴の把握はもちろんのこととして、土器の出土状況にも多くを負うこととなっている。また、『図解考古学辞典』中の「けいしき」の項において氏が「様式」の使用法について述べた際には、「最上のものとはいえない」との但し書きつきながら、「弥生式土器の研究においては、器形による手法の差がはげしいので、壺の型式に属するA型式と甕の型式に属するB型式とが同時に存在したことをまとめ、A・B両型式の同時性をあらわすために、それらがおなじX様式に属するという説明方法をとっている。」と述べ、こういう様式の識別が遺物の比較研究のみによつてなされるものではなく、遺跡における伴出關係に判断の重点がおかれることとなっていることを述べている。このようないわば便宜的ともいえる様式設定法が、個々の研究において有効性をもっているのは、田中琢氏が述べるように、「(様式)が実体としてその一部を露呈するのは、厳密に同時代性が確認された一括遺物の形をとる」ことによるものであらう。

小林行雄「様式」『彌生式土器聚成図録 正編』一九三八年

小林行雄「けいしき」『図解考古学辞典』一九五九年

田中琢「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ』一 一九七八年

(22) 小林行雄「先史考古學に於ける様式問題」『考古学』四—八 一九三三年

(23) 都出比呂志「弥生土器における地域色」『信濃』三五—四 一九八三年

(24) 小林行雄氏は下記の文献中においても、「今、土器の地域により又は時期による相違が論じられるといふのは、變化するものの單位として一つの土器群のうちに存する土器様式が考へられているのであるが、或は地域的なものとして、或は時間的なものとして様式差が取り上げられるのも、様式と様式との境界を明らかにするが爲の手段であつて、その間における様式の在り方に變化はないのである。」と述べている。

小林行雄「様式」『彌生式土器聚成図録 正篇』一九三八年

(25) 註(5)に同じ。

(26) 小稿において取り上げた「縄文土器大観」4に掲載された「縄文土器様式編年表」には「本表の作成にあたっては、安孫子昭二、泉拓良、大沼忠春各氏の協力を得たが、責任は小林にある。」との註記が付されている。

(27) 主として註(5)文献による。

(28) 下記の文献においては「指宿式」を同様式に含めたが、これは筆者自身の判断によるものである。

松永幸男「九州磨消縄文系土器様式」『縄文土器大観』四 一九八九年

(29) 前川威洋「九州縄文文化の研究」一九七九年

田中良之「磨消縄文土器伝播のプロセス―中九州を中心として」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上 一九八二年

沢下孝信「福岡県・黒山遺跡について―三万田式土器の再検討―」『古文化叢談』第11集 一九八三年

杉村幸一「縄文時代後期北久根山式土器の一考察」『岡崎敬先生退官記念論集東アジアの考古と歴史』中 一九七八年

田中良之・松永幸男「広域土器分布圏の諸相―縄文時代後期西日本における類似様式の並立―」『古文化談叢』第14集 一九八四年

(30) 田中良之・松永幸男「広域土器分布圏の諸相―縄文時代後期西日本における類似様式の並立―」『古文化談叢』第14集 一九八四年

(31) 先述のように、小林達雄氏は土器様式圏の広がりについてこれをささえた集団の地域的なまとまりがあったことを想定し、これをもとに「縄文時代領域論」を展開している。林謙作氏が述べるように「ひとつの〈土器様式〉の分布圏が、ひとつの〈核領域〉にあたる」と考えられるが、そうなる土器様式間に質的な差が存在する場合、同じ〈核領域〉として設定された地域の中にも異質なまとまりが含まれることとなる。

林謙作「縄文時代史16・縄文人の領域(3)」『季刊考古学』第42号 一九九三年

小林達雄「縄文時代領域論」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上巻 一九八三年

(32) この点に関しては、田中良之氏の御教示に負うところが大きい。

(33) 地方差・時代差を示す年代学上の単位である山内氏の「型式」は地域差・時代差を弁別できる属性を抽出し細分化することによって精緻化がすすむが、小林達雄氏の様式がこのような性格をもつ山内氏の「型式」に相当する土器群のまとまりを変遷段階としてもつということは、必然的に空間的に類似する土器群をまとめるという性格が希薄になることが予想される。

(34) 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集 一九七九年

(35) 註(4)に同じ。

(36) 註(5)に同じ。

(37) 田中良之「磨消縄文土器伝播のプロセス—中九州を中心として」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上 一九八二年

岩永省三「土器から見た弥生時代社会の動態—北部九州地方の後期を中心として—」『横山浩一先生退官記念論文集 生産と流通の考古学』一九八九年

(38) このような土器群を把握する概念に質的な差異が明確に認識されたものとしては、田中良之氏の「ハイレベル」の様式・「ローレベル」の様式、都出比呂志氏の「地域的小様式」などがあげられる。この両者の概念の対比は都出比呂志氏によって詳細に論じられ、田中氏の「ローレベル」の様式が都出氏の「地域的小様式」に相当するものとされている。いずれにしても、「ローレベル」の様式あるいは「地域的小様式」とされるものは、これを包括する「ハイレベル」の様式内での漸移的な変化をとらえたものであり、抽出されたまとまりの間に相互に明確な境界を引き難い部分を常にもつものである。また、分類の指標次第で漸移的にレベルを異にした無数の分類案を提出できるものでもある。

小林達雄氏の「様式」は氏の論旨から考えて、田中良之氏も既に指摘するように、同時並存の「様式」間においては、相互に田中氏のいう「ハイレベル」的な関係にあるまとまりを示すものを指すべきであろう。また、小林達雄氏の「様式」は時間的な広がりをもつものであるが、氏の「様式」において時間的に連続する「様式」が系統的に異なる場合にはこれも田中氏のいう「ハイレベル」の様式間の関係に相似のものとして一応とらえることが可能であろう。しかし、系統的に連続するものの中には、各属性にみられる変異が著しく様相を異にする場合（例えば、曾畑式土器と阿高式土器との関係等）、あ

るいは用いられる属性変異のヴァリエーションに緩急の差はあるものの連続的な変化がみられるもの（例えば、南九州地方の塞ノ神式及び平椋式を含めた貝殻文円筒形土器群等）などの、おそらくは「ローレベル」の様式や「地域的小様式」においても存在が予想されるような、様々なレベルにおける土器群のまとめ方が存在するであろう。いずれにしても、質的な相違を明確に認識し得るのは「ハイレベルの様式」と「ローレベルの様式」あるいは「地域的小様式」との間にみられる差であり、後二者における質的なヴァリエーションの選択や小林達雄氏の「様式」内における階層的に下位の範疇の抽出は研究の必要性に应じてなされるものであろう。

田中良之「磨消縄文時代伝播のプロセス―中九州を中心として」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上 一九八二年
都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』一九八九年

（北九州市立考古博物館）